

る。水が冷たい。右岸からの支沢を合わせて先に進む。しかしすぐに湧水地点に達し、水がなくなってしまった。その先は40mの滝。そしてその上はずっとスラブである。水はない。検討した結果、ここで遡行を中止し、引き返すことにする。

(記・

[タイム] 登山口駐車場(7:20)→博士沢右俣出合(7:25)→遡行終了(8:20)

只見川中流域左岸の沢

塩沢川支流立安沢左俣

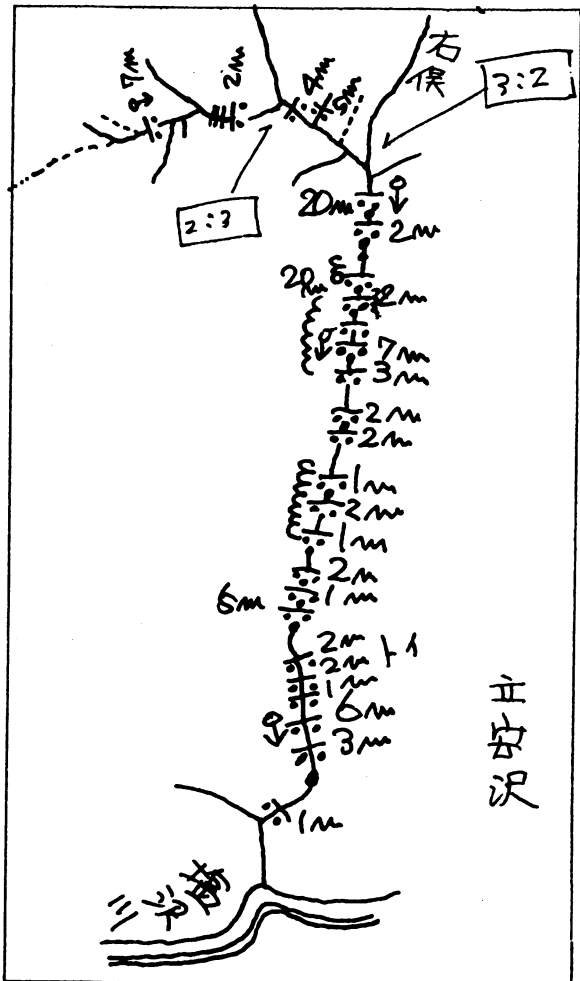
1994年7月30日
L系

天気晴。倉前沢の源頭から尾根に出るが、相変わらず風がなく、うだるような暑さである。できるだけ水分を補給し、立安沢の下降にかかる。

ブッシュをつかみながら急斜面を下降すると、ヤブこぎなしで、すぐに沢の源頭となる。沢床は湿っている程度で、細いが傾斜は急。15分ほど下降すると、最初の滝に会う。7mはあるだろうか。ザイルを出して、アップザイレンで降りる。支沢を合わせながら水量を増してゆくと、4mの滝。クライミングダウンで降りるが、左岸に擦り切れたロープが残っていた。山菜採りか釣人か。結構人が入っている沢のようである。

やがて右俣と合う。さして変化のない沢だったが、右俣と出合ってから様相が一変する。最初は20mはある柱状の滝。順層だが、クライミングダウンには高度感がありすぎる。中央部をアップザイレンで降りる。次の20mの滝は、右岸を少し懸垂してから降りる。滝は次から次へと出てくる。1~2mの小滝群の後、左にカーブする釜をもった5mの滝は、クライミングダウンで降りる。

6mの滝をアップザイレンで下降し、3mの滝を降り右にカーブすると、核心部もいよいよ終わりとなる。下降を始めて3時間ほどで塩沢川本流。林道はもう目の前だが、メジロの大群に襲われてひどい目に会う。メジロには今回の山行期



間中、ずっと悩まされた。来年は完全装備で沢に入ることにしよう。

(7)

[タイム] 尾根(11:15)→沢源頭(11:25)→右俣出合(12:25)→塩沢川本流出合(14:35)

小塩川支流倉前沢中俣

1994年7月30日

L

今年の東北の梅雨は、7月の初めに明けてしまった。こんなことは今までに経験がなく、その後の猛暑も記録づくめであった。梅雨明けを心配しながらの例年の沢登り合宿も、今年に限っては天候の心配は無用であった。

前夜のうちに福島を発ち、蒲生川の右岸にテントを張って泊まる。早朝車で移動し、塩沢上田の集落から小塩川にそった林道を、滝の沢出合まで入る。退避所に車をデポし、身支度を終えて歩き始めると、林道はすぐに行止りとなった。

沢に入ると、すぐに二俣となる。右俣との出合である。水量比は1:1である。左の本流に入る。河原を少し歩くと、沢は再び二俣に分かれる。水量比は3:2で左俣の方が多いが、私達は地図に倉前沢と記されている中俣に入った。

中俣に入ると、水量はぐっと減ってしまった。流れも緩い。両岸が高い土の壁になっていて、川床は廊下のようなのである。ここまで来てようやく滝が出てきた。3mの滝を難なくクリアし、続く5mの滝へ。松沢君が右岸のカール状の溝を踏ん張って直登し、私はザイルで確保してもらおう。上部が滑りやすい。滝の手前にはイワナがいて、つかみ捕りにしようとしたのだが、メジロの大群が襲ってきてそれどころではなかった。今年は猛暑が続き、各地でアブやスズメバチが異常